



### 詩篇107-109篇の編集構造

詩107 主祈#5 2021.9.1

公正さばきのみわぎ救出

民 5巻α(β)にβ(α)しい  
 「主に感謝せよ。神をほめたまはさばさう」 1318:52 44と教へ  
 「若しα(β)中β(α)を... → Psal18:6 8:33,35 107に感謝して主に祈りよ。 Psal106:47 主に感謝する=悔い改む

詩108 主祈#6

敵 万世、ふたつの詩の合体(α+β)。しかも後半 Ps59-60は主さばき  
 57: 国を賛美する。60: 国をさばかゆる - 偶像、他の神々。国をさばき、よき民の救い  
 = Psal117 Psal18:3 ハレルヤ 敵から救はれり。 1318:60 国を主さばさることを知る。

善悪のみのみわぎ救出

詩109 主祈#4

次110... 107~110の7が110何ぞや  
 (ほすれい。しいたけから救い出す。-恵み-見捨てるい。

主に感謝せよ。 <sup>110</sup>110.111.112

α(β)にβ(α)しい <sup>107</sup>107 <sup>108</sup>108

= 救出 = 正義(α) + 公正(β) = 主αβ = 107 108 = 109

アブラハム契約の約束。正義と公正のみわぎなのですね。正しいさばきのみわぎ。正しいさばき、正義と公正です。正義と公正のさばき、みわぎをなしてくれるので、主の名があらわされる。主の名というものはどういうものかということ、アブラハムに与えた約束の通りに、主が共にいてくださることが主の名ということ。その主の名があらわされる

詩篇第5巻第1集、107篇から118篇の中の107、108、109というところをどうなっているのを見ているところです。第5巻全体としては、第1歴代誌の16章にあります。「ハレルヤ、主に感謝せよ、主はまことにいつくしみ深い、その恵みはとこしえまで、ハレルヤ」という「ハレルヤ」と「ハレルヤ」に囲まれて、「主は良い、恵みはとこしえ」、ここが119篇と都上り。最初が「主に感謝せよ、ハレルヤ」最後も「主に感謝せよ、ハレルヤ」で囲まれているというのが第5巻の全体像です。

最初の119の前までの107から118まで。この詩篇集が「ハレルヤ」という言葉で始まっています。111から112も含めて「ハレルヤ」から始まっています。こちら(左表113-118)はエジプト人のハレルと呼ばれたりするようです。107から112までが「主に感謝せよ」、113から118が「主をほめたたえよ、ハレルヤ」の構成になっていると前に分析していました。107から112までの「主に感謝せよ」という段落なのですが、107、108、109、こちらは民側ですね。110から112は王様側と分けられるようです。その主に感謝せよと言っているのですが、そこにいろんなものを付け加えてみる。何を感謝してるのかということ、主のなされたみわざに感謝する。主のなされたみわざとは何ですかということ、エジプトから連れ出すみたいに、救い出すみわざなのですね。救い出してくださったみわざに感謝する。どうやって、どうしてという事の理由が、アブラハムの契約の約束。正義と公正のみわぎなのですね。正しいさばきのみわぎ。正しいさばき、正義と公正です。正義と公正のさばき、みわぎをなしてくれるので、主の名があらわされる。主の名というものはどういうものかということ、アブラハムに与えた約束の通りに、主が共にいてくださることが主の名ということ。その主の名があらわされる

ために、憐れみとさばきがなされる。憐れみと言っているのが109篇。裁きと言っている方が107と108です。107の方は民を連れ出す、108の方は敵をさばくということです。民をさばく、敵をさばくということで、この107、108、109が、民を救い出すということの詩篇のグループです。いち番引用が多い110篇。110、111、112は、誰がみわざをなしたのかという王様側ですね。王様と民で言うと、王様側はどういう方なのか、なぜ連れ出したのか、どうやって連れ出したのか。これが110から112まで。主のなされたみわざ。誰が、誰をどうやって、ということを表して、その主の名に感謝するというのが、この第5巻の第1集の半分ですね。主に感謝せよということを表してると思われます。

106篇、第4巻の105、106というのは歴代誌に引用されているように、契約の箱が入ってきて、そのみわざを思い出す。アブラハムの契約を思い出して感謝するという詩篇で、第4巻が終わっていました。その中でも「主に感謝せよ」の言い方があります。106篇の出だしと107篇の出だしが同じなのですね。この中にもアブラハムの契約を覚えてくださったというのがあるのですが、最後の106篇のところは、「にもかかわらず、にもかかわらず」というところでしたね。先祖たちと同じように罪を犯し、悪を行なったと。それにも関わらず、神様は憐れみを覚えてくださって、契約の通りに救い出したというところで106篇が終わっていました。

前回の分析の時に言っていなかったのですが、この106篇の6節に「先祖たちと同じように罪を犯し、不義をなし、悪を行なった」という言い方がありますが、これはソロモンの神殿奉獻の祈りの中にある言い方なのですね。それを引用しているということだと思います。民が罪を犯して他の国々に連れられて行った時に、神殿に向かって「私たちは罪を犯しました、背いて悪を行いました」と言って、「悔い改めて祈るならば許します」ということをソロモンの神殿の祈りで祈っています。そのことを引用して、ここから悔い改めを言うというのが106篇だと思われます。

107篇も同じように「主に感謝せよ」から始まって、何度も何度も、「苦しみの中から主を呼んだら救われる」という詩篇になっています。同じような出来事が記録されていますけど、107篇の方は、自分たちの罪を許してくださいというよりは、その「苦しみの中で呼んだら聞いてくれた」という感謝の歌なのですね。それで、その中にも神殿に捧げた歌、神殿奉獻の言い方を思い出すということです。第1歴代誌(訂正:列王記)の8章52節にも主を呼ぶと主は答えてくださるということが、神殿を捧げる歌の中に書かれています。主を呼ぶと敵から救われるとか、主を呼ぶと祈りを聞いてくれるというのは、ダビデの歌、詩篇の18篇の中にも書かれているものなのですね。詩篇18篇は救い出された日に歌ったという歌でしょ。ですから、救い出された日という時には、この呼んだら答えてもらう、約束の通りに導かれるということがはっきり分かるものだと思います。第1列王記の8章の祈りの中ですね。「主のしもべの祈りを聞いて叫び求める時、呼び求める時に聞いてください」というのがここにあります。苦しみの中で主を呼ぶと、主は答えて救い出してくださいという繰り返しなのですね。それで、「主の奇しいみわざに感謝しなさい」というのが、この107篇です。「苦しみの時に主を呼ぶと主は答えてくださった」というのが、出エジプト記の決まった言い方というよりは、出エジプトの出来事のスタート地点ですね。救いのスタートは、「苦しみの中で主を呼んだ、主に叫んだ」。これがエジプトから連れ出されるスタート地点。これは、出エジプト記の2章、3章あたりに出ています。呼んだら、叫んだら聞いてくださったのは、アブラハム、イサク、ヤコブの契約を覚えて憐れんでくださったからだと。この出エジプト記2章に書いてある通りに。「主は必ず共にいる。だから、連れ出します。私は共にいる」という名前の神だから、アブラハム、イサク、ヤコブの神だから。」というの、こ

のエジプトから連れ出す時の宣言になっています。そのことを107篇はわかっています、そういう箇所を引用して主が共にいるアブラハムの約束を覚えて連れ出してほしかったということが歌われているものだと思います。ですから、ただ主に感謝するというよりは、その約束のとおりのみわぎをなして下さったので感謝するということが、107も108も109も暗示している。もしくは、すぐに連想するものというものだと思います。

108篇は2つの詩篇が合体しています。57篇と60篇のそれぞれ後半が合わさっている詩篇なんですね。珍しいですよ。半分ずつが合わさっているのですけれど、55篇から60篇までは、ダビデの歩んだ道について書かれている中の「主がさばきます」という段落なのですね。その中からこの2つが選ばれている。主が国々をさばきますということ。憐れんでさばきます。復習してさばきますという形の「主が敵をさばく、偶像の国々、他の神々の国々をさばいて民を救う」というのが、この55から60までのまとめですね。108篇の中にある57篇の後半の中に、「国々の中で感謝します、国々がほめたたえるようになる」というような言い方がありますね。この言い方は、117篇、あの一番短い詩篇を思い出します。この108篇の方は、国々の中で民が歌っている。117篇の方は国々が歌っているというように、似ているけど違っているんじゃないかと思えます。なんです、この同じ出来事の中で全世界が賛美するようになるというのがよく分かるところが引用されていますね。117篇で対応している感じなのです。ですから、国々も賛美する。国々が裁かれるのが、このモアブ、ペリシテ、エドムと名前が出てくる場所です。このモアブ、ペリシテ、何々という言い方を聞いたらこれは何を思い出さなきゃいけないかって言うと、出エジプト記の15章のモーセの歌です。この中でペリシテの住民、エドム、モアブ、カナンに住む民が、そのエジプトから民が連れ出されたのを見て恐れおののいているということが、直接この国の名前が入っていますね。「右の手で救って下さった、そして聖所に導いた」。108篇のこの60篇を引用しているところも「神はその聖所で言われた」というところから引用が始まります。ですから、エジプトから連れ出されたという出来事をこういうところからも連想するものだと思います。それで、ここの107篇は、民を連れ出した。(108篇は)敵をさばいたというのが、このアブラハムに約束された「義と公正」ですね。さばき、ミシュパットの2つの側面ということだと思います。

109篇は全然違うような感じですね。109篇は貧しい者を救う。憐れんで救い出すということが109篇です。107から112までを見ると、111、112も憐れんでくれるという正しい(正しいと言った時は憐れむという言葉と一緒に考えてくださいね)憐れむ主であるということが強調されていました。110篇の方は国々を納めるというものです。ですから、109篇はこの憐れんで下さったことに感謝する。107から108、そして110は、敵から救い出されたということを歌っているという2つの違いがあると思うのですが、この義と公正ですね。義の方がこの109篇まずね。民に対する憐れみということで109篇なのだと思うんですけど、この109篇は、109篇はって言うか107、108、109とどういつながりだろうかということなのですが、主のなされたみわぎ、主のなされたみわぎというのは、神様の約束、アブラハムの約束のとおりになされた。つまり、アブラハムの子供にされた。アブラハムの子供に約束された相続が与えられたというみわぎなのです。

主の祈り主の祈りの6つの課題は、「私は神である、そして、あなた方は子である」という事を成就することを求めています。別の言い方で言うと、アブラハムの契約が成就することを求めている祈りの課題。その後半の3つ、「パンを与えてください」、「罪を許してください」、「悪者から救ってください」。この3つの課題が、107、108、109に現れているんじゃないかと思えます。107は罪の赦し。108は悪から守られる。109は

パンが与えられる。109の中に「ご飯がない、貧しい、食べ物がない、断食をしている」とあります。この貧しい中で悪者が虐げる、なじるところから救われるという話なのですが、これは、主イエスのバプテスマの後の最初の戦いですね。サタンが現れて、お腹が空いて断食しているところで、「あなたが神の子なら石がパンになるように命じなさい」というあの箇所を109篇は思い出すものなのじゃないかと。その貧しい者を連れ出して、死、恥、虐げから救い出してくださるということによって、神の子である、アブラハムの子孫であるということがあらわされるというのが、109篇というように見ることができると思いますので、109篇は、憐れみのみわざによって救い出されるという主の祈りの4番目、パンの話。107篇は、正しいさばきによって民が救われる。108篇は、正しいさばきのみわざによって敵が裁かれる。これが、107、108、109の繋がりがなんじゃないかと。「主に感謝せよ」ということを具体的にそういう面から教えている編集構造になっているのじゃないかと思われま。